

## 身体を覚醒させる建築に関する研究

—荒川修作の建築作品および美術作品の比較分析から見る建築的特性—

### A Study on Architecture Awakening Body

—Architectural Characteristics Judging From Comparison Analysis of  
Architectural Works and Art Works of Shusaku Arakawa—

○松田愛夏<sup>1</sup>, 山中新太郎<sup>2</sup>

\*Aika Matsuda<sup>1</sup>, Shintaro Yamanaka<sup>2</sup>

This paper focuses on Shusaku Arakawa who pursued architecture digging up possibilities of body and analyzes works of the life mainly on architectural point of view with his thought. Aiming at human being relief, it was the plan that snuggled up to human instinct throughout.

### 1. 背景と目的

建築には身体に刺激を与え、行為を誘発する力がある。これは現代、深刻化している心身症や体力低下などの社会問題に対して有用な要素であると考えられる。日常の空間に覚醒の契機を見出す建築的形態を意図的に組み入れた計画を行うことで、日々の生活の中で無意識のうちに「人間の身体の可能性を広げ」<sup>1)</sup>、心と体が一体となり、ひいては日々の生活水準を上げる一助になるだろう。本研究では、「身体の可能性を掘り起こす建築」<sup>1)</sup>を追求した荒川修作に着目し、彼の作品や関連する事柄を手掛かりに彼の思想と建築作品との関係性を明らかにするとともに、建築作品における図面により空間構成としての実態を捉え建築学的視点から荒川修作の建築を検証し、身体を覚醒する建築に対する方法論の一助とすることを目的とする。

### 2. 研究方法

「身体の可能性を掘り起こす建築」<sup>1)</sup>について建築分野に限らず芸術、哲学、科学など幅広い視点から追求し多くの作品を残した荒川修作の建築作品および芸術作品を対象とし、関連する図版・写真・テキストから彼の思想と生涯にわたって残した作品との結び付きについて検証する。また、建築雑誌『新建築』に掲載された2作品「養老天命反転地」および「三鷹天命反転住宅-memory of helen keller-」においては詳細な分析対象とし、空間構成としての特性を捉え建築的観点からの分析を行う。

### 3. 本研究の位置づけ

坂上ら<sup>2)</sup>は荒川修作の経歴や作品における解説はされているが①建築作品における建築学的視点による分析(図面による配置計画・空間構成の検証)はなされていない。また建築作品と芸術作品において各々の考察については言及されているが②両者の比較を軸にその類似点や相違点、問題点については言及されていない。よって本研究では、建築学視点から彼の建築作品を検証した上で彼の観念・思想がいかんして芸術作品および建築作品に表現されているか示唆し、それらの

比較から彼の建築作品を考察し、身体を覚醒する建築への方法論としての今後の在り方について論じる。

### 4. 荒川修作について

名古屋市出身(1936-2010)の建築家あるいはコーディネロジスト(芸術・哲学・科学の総合に何か実践する人)<sup>2)</sup>。武蔵野美術学校中退後、当時の日本美術界に革新的な気風をもたらした読売アンデパンダン展に初出品しネオ・ダダイズム・オルガナイザーズの結成に参加する。1961年に渡米後、18年間NYに滞在し詩人でありパートナーのマドリン・ギンズ氏と共同作業を続ける。国内外で多数の受賞歴がある。

### 5. 芸術作品から建築作品への展開

初期の代表作品に「棺桶」をテーマとし木箱にセメントのオブジェを入れて構成した数多くの作品がある(Fig1)。これを坂上<sup>2)</sup>は「死と同時に再生、生命の萌芽が暗示されている」と述べているが、荒川の少年時代の戦争体験や持病により強いられた闘病生活の経験が人間の生命、生、死への関心を抱く契機となり、「死の縁から生還した現実」<sup>2)</sup>が生や死を暗示するような作品に投影されているとも述べている。単に死を連想させる苦悩による表現ではなく、“新たな兆しを見出し、生の創造へと向かう強い意志”が示唆されていると考えられる。



Fig.1 棺桶シリーズ

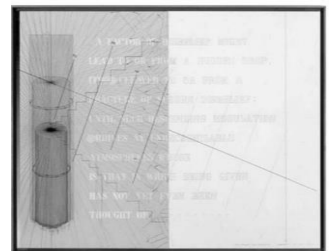


Fig.2 図式絵画

1 : 日大理工・学部・建築 2 : 日大理工・教員・建築

ついで渡米以降は矢印・言葉・線などによる「図式絵画」へ移行した。世界的文脈での制作として絵画の成立を問い、要素の抽出により「還元」<sup>3)</sup>し「普遍性」<sup>3)</sup>を目指した。さらに絵画に命題を加えた「意味のメカニズム」を発表し見るものに行為を促す実験展を世界各地で実施し、言葉とイメージによる「実態の曖昧さ」などが示され、今置かれている世界がいかに宿命的であるか、「再構築」<sup>3)</sup>していくことの必要性を提示していると考えられる。

1990年代以降、空間全体をデザインする作品へ展開する。「遍在の場・奈義の龍安寺」はインスタレーションとして建築家：磯崎新との共同で美術館の展示室につくられた(Fig3)。龍安寺の庭の「非日常」を想起させるものと街角の公園でどこでも見かけるベンチなどの「日常」空間にあるもののが同時に設置され、過去と現在、未来の時間的感覚、そして自分は今どこにいるのかという場所的感覚が「曖昧」になり“混乱”させる。この場において、人間は意識をあるいは知覚を正しく環境の中に遍在させていく<sup>4)</sup>ほかない。この作品は新しい「知覚が降り立つ」<sup>5)</sup>という荒川の思想が反映されていると考えられる。



Fig.3 インスタレーション作品

## 6. 建築作品における図面分析

### 6-1. 三鷹天命反転住宅 -memory of helen keller-

2005年、東京都三鷹市に一般の集合住宅を建設した。円筒形や方形を組み合わせ、色彩は赤、青、黄の反対色で構成。壁は傾き、床は段差が多く、常に身体に注意を払わざるを得ない。この住宅でも荒川が目指したのは「人間が本来持っていた感覚を呼び起こし、新しい感覚を生み出す」<sup>6)</sup>ことである。一見すると、奇抜な色彩やうねった形状などから奇をてらうデザインに見える。しかし図面により、居住性に効果的な次の点などが示唆された。

1. キッチンが必ず中央にあり、他機能より 400 mm程低い位置に配置。→居住者同士の関係性を深め、閉鎖感を軽減し、老若男女が同じ空間内で様々な視線を交わす契機を生む。

2. キッチンを囲むように凹凸のある床のリビングダイニングが配置され、そこに多様な使い方が可能な柱が点在。→このリビングは使用者の創造力次第で老若男女問わず何通りもの使い方で楽しむことができる。

これらのことから、単に刺激を与える要素が備えられているのではなく、その前段階に人間のモジュールや居住する上で大切な観念が考慮され、人間の本能に寄り添った計画の先に、新たな知覚を発見しようとする荒川の意志や願いのようなものが感じられる。



Fig.4 三鷹反転住宅の内観

### 6-2. 養老天命反転地

岐阜県養老町の 18,000 m<sup>2</sup>の敷地に巨大なテーマパークのような作品を展開した。全体がすり鉢状で大変起伏に富み、最高傾斜面は 25 度であり身体を意識して使うことを余儀なくされる<sup>2)</sup>。敷地全体に日本庭園を払拭させるようなランドスケープ、スケールや方位が異なる日本列島の形が各所に配置され、また空間的・時間的に様々なスケールの中に自分の身を置くことで「意味を解体」し、その先に根源的な力の噴出あるいは「再構築」<sup>3)</sup>させる要素がちりばめられている。

道幅や壁、家具などの寸法、床の傾斜において数値的な統一性はない。しかし、そのある意味で非常識な空間は新しい倫理を作り上げ、自己の中にある「心」を見つめなおす機会を与える要素となりうるのではないか。

## 7. 結論および考察

本研究を通して、荒川は生涯に渡り作品形態を問わず一貫して「人間救済」<sup>6)</sup>へ向けた作品を提示してきたことが分かった。そしてその手法形態として最も効果的なのが「建築」であると断定している。具体的な手法は①人間の生命に関係する創造性を掻き立てるとともに相反する意味の事柄を同時に提示することで、要素を「還元」<sup>3)</sup>し、知覚を「再構築」<sup>3)</sup>させる②湾曲した床・壁による空間構成や予測不能なスケールにより五感を刺激させ、本来持っていた身体の可能性を生み出すなどの操作をしていることが示唆された。

現状として彼の建築作品は建築家の中で疑問視されている節もあるが、閉鎖感のある社会情勢の中ではっきりと希望を見出し<sup>7)</sup>能動的な関係<sup>8)</sup>で人間の身体と建築空間を結び付けようとする彼の建築は十分に注目する価値があるのではないだろうか。快適さだけでなく居心地のよさを探求し、形だけでなく思想を継承していく姿勢の必要性、また「実態」や「時間」に対するもう一つの新しい考え方を荒川の作品を通して学ぶことができるだろう。

### 【参考文献】

- 1) 荒川修作+マドリン・ギンス：建築する身体-人間を超えていくために-，春秋社，2004年
  - 2) 坂上桂子：荒川修作と 21 世紀の新しい価値の創造-日本，アジア，西洋を超えて-，2015年
  - 3) 高橋幸次：序論：空間を形成する-荒川修作のモチーフの諸相をたどる試み，『荒川修作の実験展-見るものがつくられる場』展カタログ，東京国立近代美術館，1992年
  - 4) 池上高志：computation，INAX 出版『10+1』No. 46，2007年
  - 5) 荒川修作：出来事から“延長”を見つけるために，新建築，1995年
  - 6) 荒川修作：“私と時空”，私の発言-『現代美術の実験展』出品作家の主張，『東京国立近代美術館ニュース 現代の眼』no77，1961年
  - 7) 丸山洋志：近代建築の対極に位置する問題作，日経アーキテクチャ，2005年
  - 8) 塚原拓：【随想】岐阜県養老公園「養老天命反転地」，公園緑地 Vol. 61，日本公園緑地協会，2003年
- Fig1.2：東京国立近代美術館：『荒川修作の実験展-見るものがつくられる場』展カタログ，東京国立近代美術館，1992年より引用  
Fig3.4：荒川修作+マドリン・ギンス-ARAKAWA+GINS Tokyo Officeより引用